

## 内藤とうがらし

本校正門横の花壇で、色付きはじめたのは「内藤とうがらし」。

スクールコーディネーターの田口さんから御提供いただいたものです。(写真 右)

新宿が、江戸時代に甲州街道に設けられた宿場「内藤新宿」といわれていた頃、あたり一面「赤いじゅうたん」のようだと言われたくらい、このとうがらしでいっぱいだったそうです。

現在、新宿区では官民力を合わせて、「内藤とうがらし」を新宿野菜のシンボルにしようという取り組みが行われています。成長を楽しみに、見守って下さい。



## 緑のカーテン

会議室前の廊下で行った緑のカーテンプロジェクトは、その影のある場所とそうでない場所、はっきりと効果を実感できました。

戸田プロジェクトリーダーを中心に、朝晩の水やりや、追肥など手を掛けた結果、沢山のゴーヤの実も採れました。中庭でもJRC部で育てたゴーヤが実っています。

来年も挑戦してみたいと思います。



<玄関の潤い>  
染矢先生ありがとうございます。

今月の一句  
「青かえで光透きたるうすさ哉」

# 警備員雑感 被災地でのボランティア活動を経験して

## 先輩職員の実績

私が災害地でのボランティア活動を行うきっかけになったのは、当時四谷小学校に勤務していた先輩職員が、阪神大震災後いち早くボランティア活動に駆け付け、また東日本大震災ではゴールデンウィークの休日を返上してまで被災地に駆け付けたと聞いたからです。

先輩に刺激され、昨年8～9月に2度、牛込一中に赴任した今年も5月の連休を利用して、ボランティアに参加してきました。参加したのは遠野社会福祉協議会に所属するNPO法人「遠野まごころネット」。生まれ故郷の地でボランティア活動に汗を流してきました。

## 全国から結集ボランティアの輪

現地では、遠野を拠点に社会福祉協議会の体育館に男性、畳の大広間に女性、それぞれ寝袋持参で数百人のボランティアの方々が連日詰めていました。日本全国から世界中から、老若男女様々な人たちが来てるのを見たときは本当に感動しました。旅館民宿に泊まる人も多く自分も民宿に泊まりました。

## 変わり果てた故郷

翌日、遠野から用意されたバスに乗って大槌、釜石、陸前高田等へ瓦礫片付けに向かいました。途中自分が小中学生のとき海水浴へ行くのはいつも陸前高田で、そこが壊滅状態になっているのを目にするのはまったく信じられない思いでした。

釜石で、海沿いに隣接する鶴住居(うのすまい)小学校の3階に軽自動車が引っかかっている、津浪がこの高さを超えたことが分かりました。

## 御先祖からの教訓

釜石のいとこの話によると、当時鶴住居中学の3年女子は、常日頃祖父母から「大地震があれば必ずその後には大津波が来るから、高台に逃げろ」と戒められていたそうです。そして地震の直後、そのことを思い出し級友や先生に逃げようと言い、もっと上へ、高台へと駆け上がった結果、ほとんど犠牲者を出さずに済んだということでした。

## いざという時の心構えとは

釜石の出来事とは逆に、宮城の大川小では悲惨にも、小学生、先生合わせて70人が被害にあってしまいました。もっと迅速に逃げていけばと思わずにはいません。最近になって、実は待機している時に、子供たちの中から高台に逃げようという声が出ていた、という話を聞きました。たとえ小学生・中学生といえども、自分の身を守るのは自分。そのためには、日頃からの準備、心構えが大切であると感じています。

逃げる時は、釘を踏み抜かないための踏み抜き防止ソール安全靴、手指を傷つけないための丈夫な手袋、ゴーグル、マスク、ヘルメット(ボランティアの必須アイテムでもある)等があれば、いざというとき少しは役立つと思います。

実際に災害に会ったとき、逃げだしたほうがよいのか、また、どちらへ逃げ出せばよいのか、あるいはその場に留まり救助を待てばよいのか、常日頃から考慮しておくべきではないでしょうか。

## <追記>

鶴住居小中学校が同時に逃げ出したと思っていたのですが、その後の小学生の作文を読むと先に中学生たちが逃げ小学生が逃げるまで4分程のタイムラグがあったようです。その作文を書いた子は小学生も逃げなくて大丈夫なのだろうかと非常に不安を感じたそうです。しかしすぐに消防署員が来て逃げろということになり最初に「ごさいしょ」という高台へ、そこで中学生と合流し手に手をとってもっと上に逃げなければ危ないという消防署員の声で「JA」へ、そこでもまだ駄目だと「せきざいてん」という所へ、そこにたどりついて津波が学校校舎を襲う場面を見下ろしとても悲しい気持ちを感じたそうです。

ほんの僅かな心構えが、生死を分ける重要な判断に繋がります。本校の避難訓練でも、災害を意識して真剣に取り組むことが大切だと思います。